

## 第2章 三島市の維持向上すべき歴史的風致

歴史まちづくり法第1条で定義される歴史的風致とは、「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動と、その活動が行われている歴史的価値の高い建造物及びその周辺の市街地が、一体となって形成してきた良好な市街地の環境」である。そのため、下記の①～③の条件をすべて備えていることが、歴史的風致の前提条件といえる。

- ①：地域に固有の歴史や伝統を反映した活動が行われていること
- ②：①の活動が、歴史的価値の高い建造物とその周辺で行われていること
- ③：①の活動と②の建造物が、一体となって良好な市街地環境を形成していること

古代、三島には伊豆国の国府が置かれた。平安時代後期になると三嶋大社が遷座したことから、大社の門前町として発達し、さらに江戸時代になると天下の要衝である箱根峠を控えた宿場町として栄えた。このように、三島が成立していく過程で、前述の三嶋大社及び箱根峠越えの道である箱根旧街道は、人々の生活に大きく関わっている。

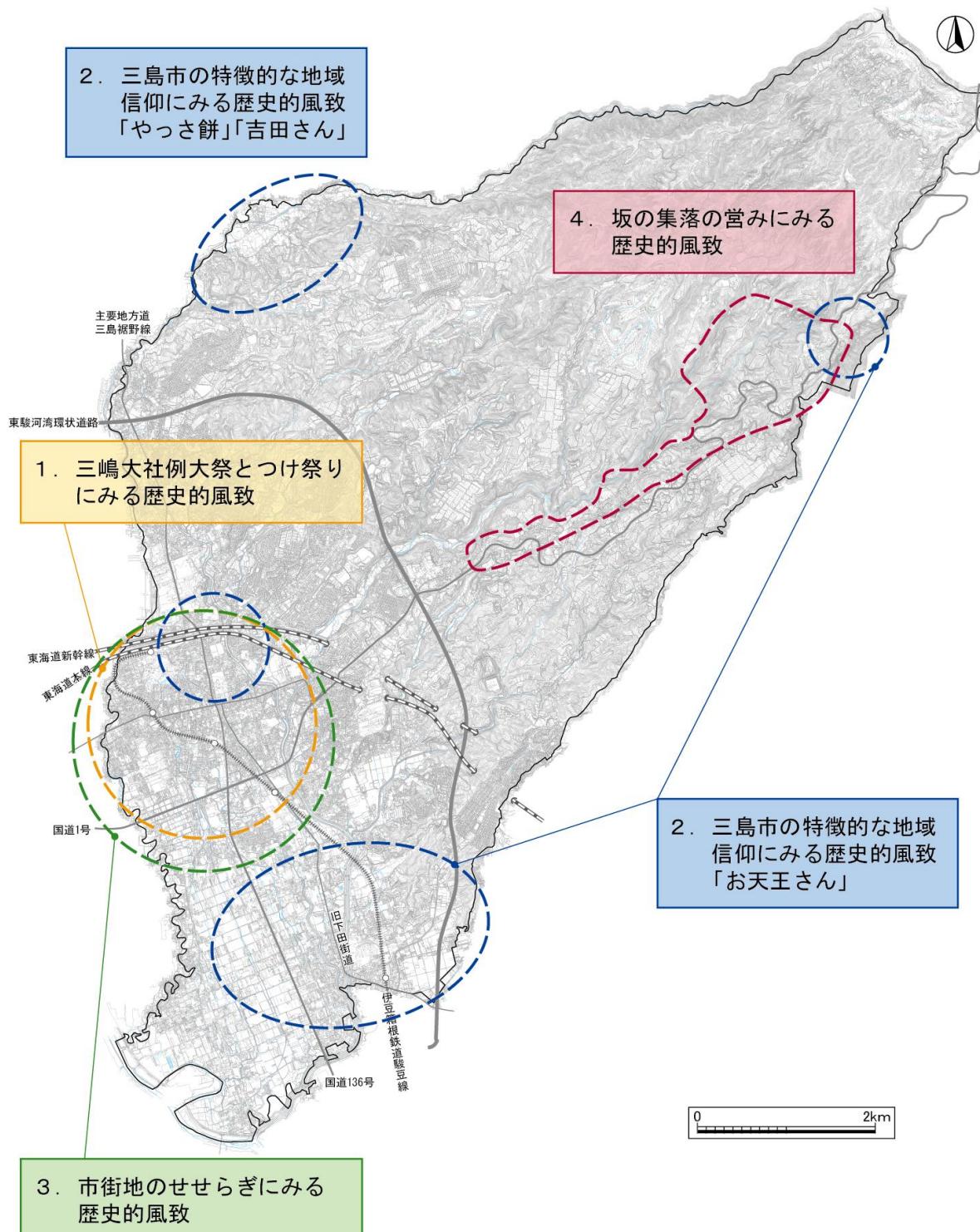
伊豆国一宮である三嶋大社は、源頼朝をはじめ古くより多くの人々の崇敬を集め、今なお多くの参詣者がある。また田祭、追儺祭、鎮花祭、酉祭、夏越大祓い、金木犀の夕、七五三祝祭、新嘗祭、師走大祓い、除夜祭などの折々に行われる三嶋大社の神事は、人々の生活に根付いており、中でも三嶋大社例大祭とつけ祭りは大社前大通りを主会場として、今では三島を代表する市民参加型の夏まつりとなっている。大社の神事以外にも特徴的な祭礼として、伊豆佐野地区の「やっさ餅」や「吉田さん」、市南域の河川流域を中心に「お天王さん」信仰があり、各地区の氏神である神社を中心に良好な環境が形成されている。

箱根旧街道は、江戸時代に徳川幕府により天下の要衝である箱根峠を越える道として整備され、西坂沿道には往来する旅人に湯茶・休憩所を提供するため五ヶ新田からなる「坂の集落」が新設された。この各集落の氏神である神社において集落成立当時から続く祭礼や水神講などの活動が、今なお続いている。さらに、山中新田（やまなかしんでん）にある山中城跡は、地域の誇りとして、集落の人々により維持・管理活動が行われている。

また、三島には富士山の雪解け水を源とする湧水があちらこちらにあり、それに伴う建造物としてカワバタ、活動として水神信仰や七月盆があり、良好な環境が形成されている。

以上のことから、本市が維持向上すべき歴史的風致は、次の4つに整理することとした。

- 1 三嶋大社例大祭とつけ祭りにみる歴史的風致
- 2 三島市の特徴的な地域信仰にみる歴史的風致
- 3 市街地のせせらぎにみる歴史的風致
- 4 坂の集落の営みにみる歴史的風致



## 1 三嶋大社例大祭とつけ祭りにみる歴史的風致

### はじめに

三嶋大社は伊豆国一宮であり、明治4年(1871)には官幣大社に列した名社である。「三嶋」という当地の名称を冠していることからも、この地に暮らす人々と三嶋大社との結び付きの強さが連想され、三嶋大社が人々の信仰の対象としてだけではなく、農業・商業・工業を中心とした実生活とも強い関わりをもって存在してきたことが窺われる。

三島市教育委員会が実施した発掘調査例から、三嶋大社が現地に遷座したのは平安時代後期頃と推定される。当時の三島は、東西方向に伸長する平安・鎌倉古道や南進する下田街道、北進する佐野街道(甲州道)が三嶋大社の西側で十字に交錯する交通の要衝となっていた。この土地環境と相俟って、三嶋大社が遷座した後、当地は物資や情報が行き交う四辻文化を育む門前町として発達を遂げた。

江戸時代になると、徳川幕府により東海道の整備が行われた。大社門前を東西に走る東海道は五街道の一つとして重要な位置を占め、物資の輸送や人々の通行などを補助する地として三島宿が形成され、これが現在の三島市街地の基礎となっている。下図『東海道分間延絵図』は、江戸幕府が五街道と脇往還を実地測量して作成した全91巻の絵巻物の三島宿部分である。江戸時代後期の宿場・街道筋を1,800分の1の縮尺で描き、街道に面する家数もほぼ正確といわれる。文化3年(1806)当時の三嶋大社、小浜池(こはまいけ)が大きく描かれ、時の鐘、陣屋、愛染院も描かれており、四辻の様子がよく分かる。

この四辻を中心に開催される三嶋大社の諸々の祭事には、大社と人々との間に農業・商業・工業などの実生活を通じて培われてきた深い繋がりを見る事ができる。特に例大祭(大社の神事。毎年8月に執り行われ、「三島夏まつり」と呼称されていたが、平成29年から「三島大祭り」に名称変更した。)における住民参加のつけ祭りは盛大に行われており、街に活気をもたらすとともに、あらゆる側面において三嶋大社は、三島の人々の精神的なよりどころとなっているといえる。

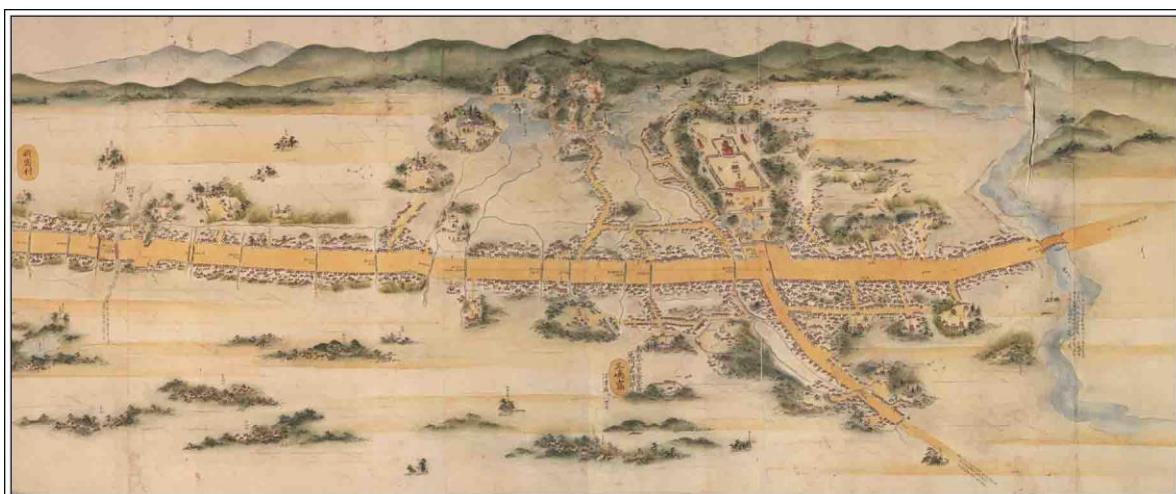


図 三嶋大社を中心に四辻に発達した三島宿（東海道分間延絵図）

## (1) 三嶋大社例大祭とつけ祭りを構成する建造物

### ① 三嶋大社

三嶋大社は、奈良時代にはすでに朝廷の崇敬を受けていたことが分かっている。当初は「海の神」の性格を有しており、海民の崇敬を受けて海上交通に関与していた。10世紀頃に編まれた辞書である『和名類聚抄』には、伊豆国賀茂郡に「三嶋」や「大社」の名が見えるため、平安時代前期までは下田の白浜に存在していたと考えられる。その後、現在の三島の地に遷されるが、源頼朝との関連を窺わせる伝説があることや鎌倉幕府成立後に頼朝によって保護されたことなどから、遅くとも平安時代後期までには遷座したと考えられる。

古代に起こった激しい噴火や造島活動が、海の神であり山の神でもあるというこの神の性質と関連づけられた。その結果、神としての崇敬の念が高まり、国府の所在する要の地である三島へ遷し、その守護を願った。遷座の背景には、このようなことがあったのではないかと考えられる。

鎌倉幕府は、総じて神社行政に力を入れていた。各国の一宮は地方支配のための精神的支柱として運用され、伊豆国一宮である三嶋大社もこうした流れの中で重要視されてきたと考えられる。また、頼朝は年始には箱根権現と伊豆山権現で武運長久を祈る儀式を行った。この両社及び三嶋大社に詣でることは「三所詣」と呼ばれ、当時の武士たちの間で盛んに行われた。三嶋大社は鎌倉時代を通じ、またそれ以降の時代も武士により貴ばれてきたのである。

江戸幕府三代将軍家光の代にあたる寛永11年(1634)には、三嶋大社の造営が行われている。この時の様子は絵図に残されており、江戸初期の三嶋大社の姿を知ることができる。幕末の嘉永7年(1854)には、東海大地震の被害を受けて本殿をはじめとした三十有余の建物が倒壊した。当時の宮司である矢田部盛治は社殿など建物の再建復興に尽力し、明治2年(1869)にそれらの造営が完了して現在の三嶋大社の姿となった。

明治4年(1871)の太政官布告によって、古代の祭政一致が理想として掲げられた。これにより、国家が神社を直接統括するかたちに改められ、また、この流れの中で全国の神社は官社と諸社とに分けられた。そして、神道国教化をめざす宗教政策の一つとし



図 三嶋大社例大祭とつけ祭りを構成する建造物位置

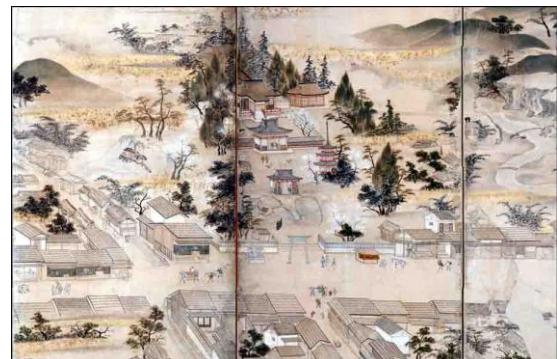


図 三島宿風俗絵屏風（部分、三島信用金庫蔵）

て、神仏判然令が出され、神道は仏教から独立することとなった。神仏習合思想を否定したこの施策により、各地で神社から仏教的要素を排除する極端な廢仏毀釈の風潮が起り、三嶋大社でも総門にあった仁王像や三重塔などが、移転・廃棄されたと伝えられている。

### ア 本殿、幣殿及び拝殿

三嶋大社本殿、幣殿及び拝殿は、平成12年(2000)5月25日に国の重要文化財として指定を受けた。社殿は南面して建ち、本殿、幣殿、拝殿を接続した複合社殿で、慶応2年(1866)9月9日に建物本体が完成した。その後、建物に付属する装飾等を施した旨が慶応3年(1867)の棟札に残されている。神を奉安する本殿は、三間社流造、桁行3間(約



写真 三嶋大社 本殿、幣殿及び拝殿

9.16m)、梁間1間(約5.94m)、軒高約7.3m、棟高約14.85m、建築面積約54.41m<sup>2</sup>であり、一重、両下造、本瓦形銅板葺で内外ともに総檜素木造である。幣殿は神前へ捧げ物を供える社殿であり、本殿と拝殿を繋いでいる。桁行3間(約5.91m)、梁間1間(約9.15m)、軒高約6.82m、棟高約6.69m、建築面積約54.05m<sup>2</sup>であり、一重、両下造、本瓦形銅板葺で、内外ともに総檜素木造である。拝殿は、礼拝を行うために本殿の前に設けられた建物である。桁行7間(約15.71m)、梁間4間(約7.85m)、軒高約6.36m、棟高約12.73m、坪数約123.37m<sup>2</sup>であり、一重、入母屋造、正面千鳥破風付、向拝3間、軒唐破風付、本瓦形銅板葺で内外ともに総檜素木造りである。建物内には嘉永7年(1854)の大地震からの再建復興中であった慶応3年(1867)の棟札が残されている。三嶋大社の存立・維持に関しては、当時の幕府老中自らが普請奉行となっていたようで、幕府がその存在を重視してきたことが窺える。16mを超える社殿の威風堂々とした構えは、信仰上重要な意味を持つ証しで、慶応の再建は徳川家光が寛永年間に造営した社殿の形式を踏襲しているため、江戸時代を代表する重要な建造物といえる。

### イ 舞殿

三嶋大社舞殿は昭和41年(1966)1月17日に市の文化財として指定を受けた。

舞殿は神前において神樂などを奉納するための建物である。境内に独立して建ち、慶応3年(1867)12月18日に落成した。桁行・梁間ともに約7.62m、軒高約4.67m、棟高約9.15m、坪数約58.08m<sup>2</sup>である。正面・側面3間妻入、周囲椽勾欄付き、入母屋妻入造、本瓦形銅板葺で内外ともに素木造である。

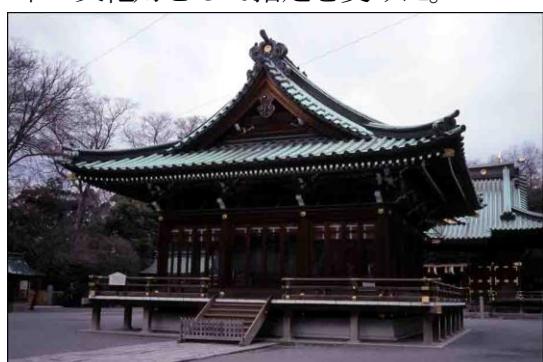


写真 三嶋大社 舞殿

## ウ 神門

三嶋大社神門は昭和41年(1966)1月17日に市の文化財として指定を受けた。神門は内郭を隔てるよう建ち、慶応3年(1867)12月18日に落成した。桁行約2.95m、梁間3.56m、坪数約10.48m<sup>2</sup>である。屋根は唐破風、本瓦形銅板葺で内外ともに素木造りである。



写真 三嶋大社 神門

## ② 間眠神社（まどろみじんじゃ）

稻荷神社の祭神である豊受姫命（とようけひめのみこと）を祀った間眠神社は、旧二日町(現東本町)にある。

三嶋大社と関わり深い摂社であり、三嶋大社例大祭では間眠神社の氏子による菅奉納祭が行われている。

境内の稻荷社については伊豆の国市(旧韁山町)の長崎に所在した金子稻荷が、狩野川の洪水で当地に流れ着き、祀られたことが伝えられている。その縁故により900年の時を超えて現在でも当社例大祭には必ず長崎より大注連縄の奉納がある。

かつて、流罪となり伊豆国北條蛭ヶ小島で暮らしていた源頼朝は源氏再興の大願を立て、三嶋大社へ百日の丑刻祈願に通う途中、大きな松の木の下でまどろんだという。この伝承から頼朝が仮眠した場所に建つ社が間眠神社と名づけられたと伝わっている。また右写真的「間眠の松」は氏子により新しく植え替えられ、現在6代目である。

社殿は慶応元年(1865)に火災のためそのほとんどを焼失したものの、同4年(1868)に再建した。ところが昭和5年(1930)の北伊豆震災のため改築の必要性が発生し、伊勢神宮および三嶋大社の神木の払い下げを要請するなどして、ようやく昭和40年(1965)に修理・幣殿増築がかなった。本殿流造り、拝殿入母屋造り、銅板葺、建築面積は約48.43m<sup>2</sup>である。



写真 間眠神社



写真 6代目の間眠の松

## (2) 三嶋大社例大祭とつけ祭りの舞台となる歴史的まちなみの主な建造物

### ① 三嶋暦師の館

三嶋大社例大祭とつけ祭りの舞台となる市街地を構成する歴史的建造物として、三嶋暦師の館が挙げられる。

平成18年(2006)10月18日に国の有形文化財として登録を受けた。三嶋大社の北側と東側一帯に広がる神領域で社家村の範囲にあり、この建物はもともと暦師である「河合家」の住宅主屋



写真 三嶋暦師の館

であった。しかし、嘉永7年(1854)の大地震で倒壊し、すぐに再建するも火災となり焼失したため、堇山代官江川英龍の計らいで、十里木(現裾野市)で廃屋になっていた関所を解体して移築したという。外観としては起り破風(むくりはふ)の式台玄関に特色があり、江戸期の関所建築の面影を見ることができる。木組みの構造は「折置き組み」工法であるため、柱の上に小屋梁の木口が外壁より出た状態になっている。玄関脇には内玄関があり、土間から暦を刷る作業場へ続く通路として利用されていた。内部は土間を挟み玄関の間、次の間、座敷、奥座敷、他二間がある。江戸時代の特色を色濃く残し、奥座敷が一段高くなつた構造は、格式の高さを感じさせる。

### ② 懐古堂ムラカミ屋などの看板建築

懐古堂ムラカミ屋も市街地を構成する歴史的建造物で、平成12年(2000)10月18日に国の有形文化財として登録を受けた。旧店舗名は村上洋品店といい、大正15年(1926)の建築である。三嶋大社大鳥居を起点とする下田街道を南方面へ約50m下った場所に位置し、木造2階建ての店舗併用住宅で、



写真 懐古堂ムラカミ屋

建物前面は洋風建築を模倣したファサードの看板建築となっている。この看板建築は、大正12年(1923)の関東大震災の復興の時に培われた技術で、外壁に銅板・鉄板やモルタルの装飾をし、建物自身が看板の役割を果たすという目立った外観及び耐火構造を備えた建築技法である。復興が一段落した頃、関東の職人が地方に流れ、流行の建築技法として紹介することとなり、この技術をいち早く取り入れたのが村上洋品店であった。正面は窓を含めて左右対称に構成され、ショーウィンドウも両端に一対となるモダンな建物である。昭和5年(1930)の北伊豆震災では被害を免れたが、防災計

画に基づく道路拡幅で曳き家が行われた。三島市では看板建築の先駆け的存在であり、建築当時は黄金色に光り輝いていた。震災後は三島でも看板建築が大流行し、多くの商店がこの建築様式を取り入れた。現在も三嶋大社にほど近い通りには、懐古堂ムラカミ屋のほかに数軒の看板建築が残っている。

### ③ 時の鐘

三石神社の境内にある鐘は、「時の鐘」と言われ、江戸時代から旅人や三島の人に親しまれてきた。最初は寛永年間（1624～1643）に鋳造され、その後何回か改鋳された。特に大きな鐘は、宝暦11年（1761）に川原ヶ谷（かわはらがや）の鋳物師沼上忠左衛門祐重によって造られた。三島宿の人たちはこの鐘の音で時を知った。しかし、第2次世界大戦時に軍戦用に供出され、現在の鐘は昭和25年（1950）に市民の有志によって造られたものである。



写真 時の鐘

## （3）三嶋大社例大祭とつけ祭りに関わる活動

### ① 三嶋大社例大祭とつけ祭り

三嶋大社例大祭とつけ祭りは、毎年8月15日・16日・17日の3日間、「三嶋大祭り」として盛大に執り行われている。市内を南北方向に貫く佐野街道及び下田街道門前と東西方向に横断する近世東海道の三島宿がつくる四辻を主な舞台として、三嶋大社と旧三島町内の広域な範囲を巡る山車の引き回しや、しゃぎりとそのリズムに乗った掛け声を特徴とする勇壮な祭りである。

三嶋大社例大祭の始まりについては、平安時代の記録に祭祀としての端緒が見える。大同元年（806）『新抄格勅符抄』の「神事諸家封戸」には、天平宝字2年（758）までに、伊豆三島神の社殿や祭祀の組織が成立していたことが窺われ、この時に成立した祭祀は三島に遷座した後も引き継がれたと推測される。

現在のように例大祭で山車の引き回しとしゃぎりの神事が行われるようになった起源もまた明確ではないが、『三嶋大社矢田部家文書』によると、天正11年（1583）に北条氏から三島周辺の社領地である川原ヶ谷郷・谷田郷（やたごう）・大場郷（だいばごう）・梅名郷・柿田郷（かきたごう）に対して、「先の御代から定められている三嶋宮の御囃子が滞っていることはよくないので、これからは励むように」と促す文書が差し出されたとある。これが三島囃子に関する記録の原初となっている。

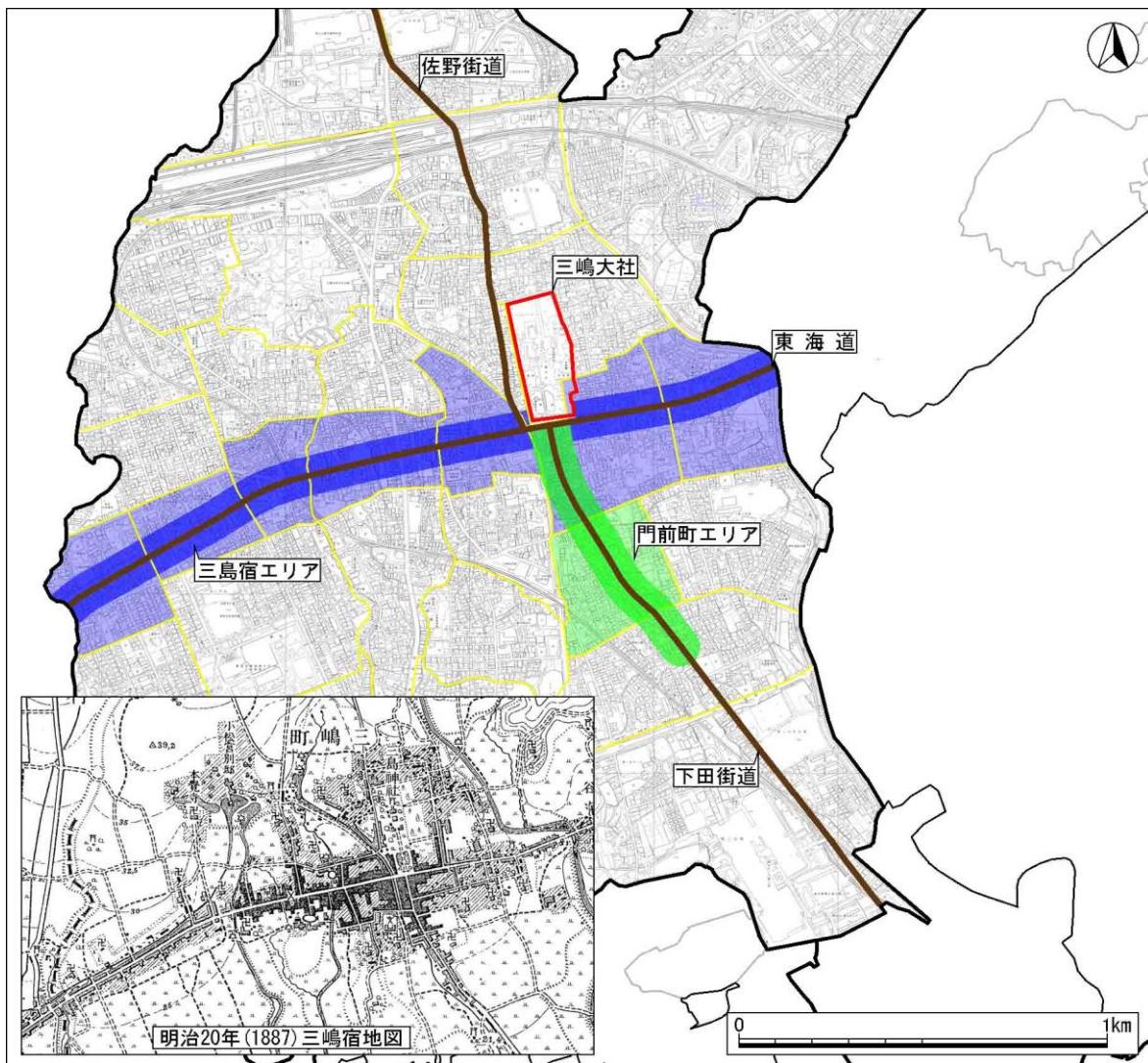


図 戦前までの三嶋大社つけ祭り参加町内（網掛け範囲）（1/20,000）

また、寛文9年(1669)には、宿の祈祷のため例祭当日に山車を引き出したいという宿側からの申し出があり、それに対する許可証文が出されている。これは『矢田部氏日記用留』に残されているもので、山車の原初の記述となっている。この文書には三島囃子の創曲者の幸若與惣太夫が、天文年間(1532~1555)に大場村に居住していたとも記されていて、創始時期を知ることができる。



図 当社祭礼町々為取替議定書

写真 昭和8年(1933)の山車の引き回しの様子

現在のようなかたちの三嶋大社例大祭となった契機は、昭和20年(1945)の終戦にある。戦前までは「お明神さまのお祭り」として主催は三嶋大社が執り行い、例大祭と神賑行事（かみにぎわいぎょうじ）である当番町の山車の引き回しが主な祭典であった。昭和21年(1946)、神社制度の廃止により国の手を離れ、三嶋大社が宗教法人となると、神賑行事は氏子会が受け持つこととなるが、戦後GHQは神道としての例大祭に市民参加を許可しなかった。しかし、市民たちがGHQへ陳情を続け、昭和22～24年(1947～1949)には「三島商工まつり」と銘打って夏まつり奉賛会を組織して実施するようになる。その後、昭和25年(1950)から氏子会、昭和30年(1955)から三島夏まつり協賛会、平成10年(1998)から町内会連合会を母体とする夏まつり実行委員会が主催運営をしている。

三嶋大祭りに先立ち、毎年5月第2週の土日、西若町に鎮座する若宮神社の祭礼が、三島町西部地域の11町（西若町、寿町、栄町、泉町、広小路町、緑町、西本町、南町、三好町（みよしちょう）、清住町（きよずみちょう）、加屋町（かやまち））の合同で催行され、しゃぎり奉納と参加町内を練り歩く神輿渡御が執り行われる。この祭礼以降ほぼ2週間置きに市内西部の13の神社で祭礼が行われ、最後の間眠神社の祭礼日（8月1日）になると、いよいよ三嶋大社例大祭間近だと市民の意識が高揚し、8月15日に三嶋大社例大祭を迎える。

三嶋大社例大祭の初日15日が境内摂社若宮神社例祭・菅奉納祭・宵宮祭・献燈奉告祭、16日が例祭・源頼朝旗揚出陣奉告祭・手筒花火神事と続き、17日は崇敬会大祭・流鏑馬祭・後鎮祭が行われる。また各日、15日は山車としゃぎりの日、16日は伝統芸能の日、17日は踊りの日とそれぞれテーマを設定して、催行されている。

つけ祭りの主体であり特徴となっているのは、かつての三島宿の範囲を中心に行われる山車の引き回し、しゃぎりの演奏、三嶋大社社頭での「競り合い」、三嶋大社から広小路駅を経由し楽寿園までの間で繰り広げられる頼朝公行列である。

つけ祭りの特徴としては他に、祭りが当番町制で行われることが挙げられる。江戸時代に記された『当社祭礼町々為取替議定書』には、文化13年（1816）に「三島宿18町を4組の当番に分け、輪番で祭りが行われた」とあり、その制度は現在においても引き継がれている。昭和40年（1965）、高度経済成長にともない町内域の再編成・町名変更が行われた際にも、その組分けは旧町名単位を基本として実施され、現在は29町6組の当番町制となっている。



人長舞・浦安舞



頼朝公旗揚出陣奉告祭



手筒花火神事



流鏑馬祭

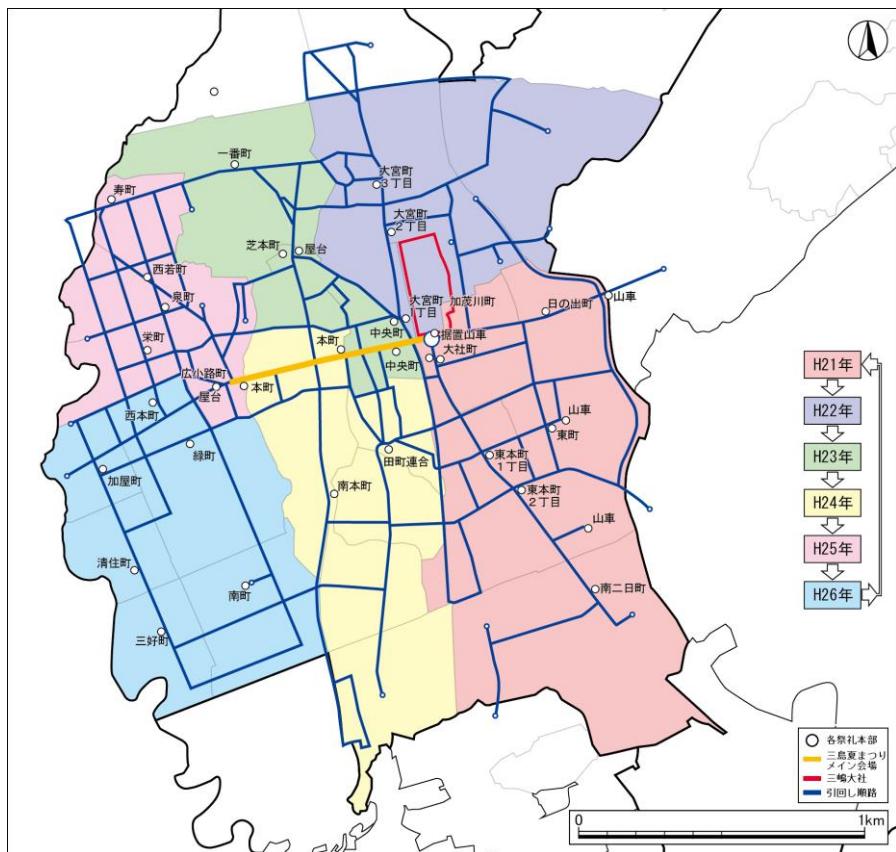


図 平成21～26年度（2009～2014）の輪番制の当番町と各町内祭典本部及び山車の引き回し順路

### ア 例大祭初日 8月15日

三嶋大社例大祭とつけ祭りは、8月15日の午前9時に行われる若宮神社例祭に始まる。境内社である若宮神社は、御祭神として三嶋大神の御子神である物忌奈乃命（ものいみなのみこと）を祀るなど三嶋大社と関わりの深い摂社である。正午になると舞殿にて献茶式と呈茶式が行われる。これは神を喜ばせるための神賑行事の一つで、続いて山車安全祈願が社頭大鳥居前で実施され、またこの時、本殿では間眠神社の氏子たちによる菅奉納祭が行われる。山車安全祈願が終了すると、旧三島町域と歩行者天国となっている三嶋大社社頭から三島広小路までの間で当番町の山車の引き回しが始まる。

近世の山車引き回し経路は記録に残され



写真 若宮神社例祭



写真 山車安全祈願

ていないが、江戸時代は演奏を担う川原ヶ谷郷・谷田郷・大場郷・梅名郷・柿田郷のシタカタ（演奏者）が三島町衆の引く山車に乗り、商家などの旦那衆の前で演奏を行っていた。また、例大祭中は観衆のための引き回しも行われていたが、当初は引き回しにルールが無く、道で山車同士が相対すると「屋台」と呼ばれる勇壮な曲での競り合いとなつた。この「屋台」は「けんか囃子」とも呼ばれ、演奏中にエスカレートして本当の喧嘩になることが多かつた。現在は山車の引き回しについては、参加する29町の山車同士がかち合わないようにルールを定めており、かち合ってしまった場合には、当番町が優先され、相手は動きと演奏を止めて静かにすれ違うということになっているが、双方の渉外係の計らいで、あえて競り合いがその場で行われることもある。順路は基本的には当番町と他町との間で話し合われる。本部の位置や道路使用許可の関係から、一部変更となる場合もあるが、種々の取り決めのもと、概ね当番町ごとに6つの順路があり、旧三島町内を限なく引き回すコースが設定されて、現在も続いている。

山車の引き回しの後は、夕方から子どもしやぎりの大会となる。日頃の練習の成果を三嶋大社社頭や山車上などで披露し、引き続き当番町6町のしやぎりの演奏となる。そのほか、大社本殿では宵宮祭、献燈奉告祭が執り行われ、1日目が終了する。

## イ 例大祭2日目 8月16日

2日目には例祭が行われる。例祭は神社で行われる大祭の中で最も重要な祭祀である。ちなみに、全国の神社で共通して行われている年間の恒例祭祀は大祭、中祭、小祭に区分されている。大祭のうち例祭、祈年祭（あらゆる産業の発展と国力の充実を祈願）、新嘗祭（神恩に感謝し、皇室、国家、国民の平和と繁栄を祈願）が三大祭である。三嶋大社においても、年間120もの祭典がある中で、最も重要な意味を持つものが例祭であり、宮司以下神職全員が精進潔斎の参籠をし、古儀に基づいた禊を行う。



写真 菅奉納の行列

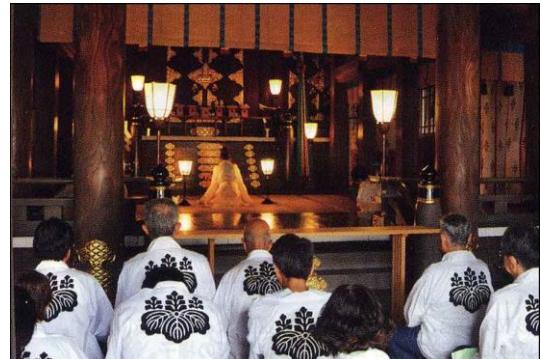


写真 菅奉納祭



写真 子どもしやぎり

古くは旧暦8月の二の酉の日に斎行していたが、明治4年（1871）に官幣大社に列格されてからは8月16日を例祭日とするようになり、今日に至っている。

午後になると、神前には海・山の幸、季節の品々が供えられ、「人長舞」と「浦安舞」の二つの舞が奉納される。人長舞は本来宮中で行われる「御神楽の儀」の中で舞われるものだが、そのほか

各地の由緒ある神社でも行われている。人長（にんちょう・にんじょう）とは御神楽の儀に奉仕する神楽人の代表者という意味で、人長舞はその長が武官の装束を着けて神前で舞を奉納するものである。日々鍛練を重ねた神職により、平安時代の手振りしながら奉納される。浦安舞は昭和15年（1940）、「皇紀二千六百年」祝典に合わせて、全国の神社で奉祝臨時祭を行うにあたり新たに作られた神楽舞であり、現在まで行われてきたものである。「うら」は心を指す古語であり、「うらやす」で心中の平穏を表す語であるとされる。静々と莊重な人長舞に対し、清澄にして優雅な浦安舞は、世界の平和を祈られた昭和天皇の御製、「天地のかみにぞ祈る朝凧の海のごとくに波たたぬ世を」を神楽にしたもので、4人の巫女により舞われ、奉納される。なお、人長舞と浦安舞は15日の夜にも行われている。

続いて、源頼朝が治承4年（1180）8月17日三嶋大社例祭の夜（18日未明）に挙兵し、見事初戦に勝利した故事にない、万民和楽を願って「頼朝公旗揚出陣奉告祭」が実施される。本殿、舞殿において出陣式を行った後、市中パレードに繰り出す。近年は頼朝役に俳優や有名人などが起用されることが多く、パレードを一目見ようと沿道には多くの人が集まり、つけ祭りにおける一つの盛り上がりとなっている。

夜になると、除災招福を願って三島の夜を飾る手筒花火神事が行われる。その噴煙が諸々の厄を祓い、福を呼ぶとされ、崇敬会員により奉納される。手筒花火はモウソウ竹に荒縄を巻き付けた花火



写真 例祭



写真 頼朝公旗揚行列（パレード）



写真 三嶋大社社頭で演奏する子どもしゃぎり

筒を脇に抱え、手を持って吹き上げるもので、大筒に至っては火炎が 10mにも及ぶため、製作者以外による打ち上げは禁止されている。神事の終わった手筒は、除災招福の御守りとして奉納者に授与され、2日目が終了する。



写真 山車の上での子どもしゃぎり



写真 競り合い



写真 競り合い

## ウ 例大祭3日目 8月17日

最終日に執り行われる神事は崇敬会大祭、流鏑馬祭、後鎮祭の3つである。崇敬会は三嶋大社に奉仕する人々の会で、崇敬会大祭では拝殿前において会の発展と会員すべての家内安全が祈られ、金幣の儀により三嶋大明神の御恵を受ける。

流鏑馬祭後に催行されるのは、午後4時に開始される後鎮祭である。「あとしづめの祭」ともいわれ、3日間に亘る例大祭諸祭儀が無事終了したことを奉告し、感謝の意を表す祭りである。

また、つけ祭りの実施会場である三嶋大社社頭から三島広小路駅までの間では午後3時から「富士の白雪やノエ」で始まる農兵節などのパレードが市民の自由参加で実施される。三島を代表する踊りとして市民に親しまれているこれらの踊りや楽隊によるパレードは、3日の間に何度も行われ、訪れた人々の目を楽しませている。そして

午後8時から行われる大社社頭での「当番町の山車の競り合い」をもって、すべての三嶋大社例大祭とつけ祭りが終了する。



写真 農兵節パレード

## ② しゃぎりと三島囃子

県の無形民俗文化財に指定されている三島囃子は、しゃぎりとお囃子を総称したものである。しゃぎりとお囃子の区別は、曲調そのものに明確に表れているという。しゃぎりは武士の士気高揚や娯楽を目的として、鳴り物を盛んに打ち鳴らしたことに始まるともいわれ、「斜切り」と「砂切り」の字があてられることもある。通常、大太鼓（おおどう）、小太鼓（こどう）、篠笛（しのぶえ）、摺鉦（すりがね）を用いてテンポよく演奏する。これに対してお囃子は、鼓や三味線を用いたゆったりとした曲調であり、優雅さをたたえている。また、両者はもともと演奏される場面も異なっていたといわれる。

三島囃子は農村の若者たちの中で受け継がれ、近世以降の祭りの民衆化とともにさらに普及・拡大し、三島宿中でも演じられるようになった。そして400有余年の間、楽譜はなく、人から人へ伝えられ、三嶋大社例大祭とつけ祭りとともに継承されてきた。

戦前まで山車の引き回しは三島宿の青年が行い、しゃぎりの演奏は「シタカタ」と呼ばれる人たちにより支えられていた。シタカタは周辺の社領地に住む青年の役割であり、この演奏担当の青年たちのことをワカイシ（若い衆）とも呼んだ。三島のまちなかをマチバというのに対し、川原ヶ谷、大場、柿田などの三島近隣をザイといった。ザイのワカイシは村のヤド（宿）という集会施設に集まり、共有田などで農事を学びながら社会人としての礼節・交流を覚えた。その中でしゃぎりについても技術を見聞きして覚え、腕を磨いて例祭日に演奏を行ってきた。現在は29町を6組に分けた当番町制で実施しているが、戦後の高度経済成長期には、この制度が徐々に弱体化する傾向が現れた。

この状況下、三島青年会議所と保存会の活動を通じて三島囃子の保存と継承が積極的に行われ、昭和42年（1967）、三島囃子が市の無形民俗文化財として指定されると、当時シタカタの主体であった川原ヶ谷の三島囃子保存会が三島囃子の継承団体となった。その後、三島囃子は平成3年（1991）には静岡県指定無形民俗文化財となり、保存会は演奏活動とともに、次代の演奏を担う子どもしゃぎりの会を結成し、育成に力を入れた。その結果、各町内会がしゃぎりに対する認識を強め、それぞれが山車を保有して自らが演奏をしたいというものに変化し、今日に続いている。現在、毎年8月15日～17日にかけて催される三嶋大社例大祭とつけ祭りでは、市中に繰り出す屋台の上でしゃぎりが行われる。

三島市内には旧三島町の枠を超えて大人の保存会と子どもの保存会が組織されている。しゃぎり保存会は、年間を通じて活動をするグループと5～8月を主体に活動するグループの2種がある。双方とも5～8月が主な活動期間で、練習量は週1～2回・夜6～9時の2～3時間程度行うところが多く、練習場所は、本番当日に設置される各自治

体の本部付近や河川敷・公園・町内公民館などである。また町内の祭りや他所の祭礼に参加してしゃぎりの普及活動を行い、閑散期には用具や山車の整備を行う。



写真 夏まつりに使用される各町内の山車

### ③ 間眠神社の活動

間眠神社の境内社である稻荷社は、伊豆の国市（旧韮山町）長崎にあった金子稻荷の祠が狩野川の氾濫により当地に流れ着き、それをお祀りしたのが起源であると伝えられる。御神体は後に返還されたが、この縁により間眠神社の祭礼日である8月1日には、毎年、金子稻荷の氏子による大注



写真 大注連縄

連縄の献上と参拝を受けている。

8月15日には、三嶋大社例大祭の神事として間眠神社の氏子による菅奉納祭が行われる。間眠神社の西側には御殿川（ごてんがわ）の旧流路により形成された低湿地帯が広がっていて、菅の産地（三島菅笠）であったと伝えられる。菅奉納は三嶋大社の清祓（きよはらえ）（神事の前後などに、身を清めるために行うはらえ）の代わりに行ったとされるが、その始まりの時期については不明である。明治元年（1868）にこの行事は一時中断するが、昭和16年（1941）に復活した。今では、菅奉納祭が行われると本格的に市民参加のつけ祭りが始まると言われている。

例大祭の神事として執り行われている頼朝公旗揚出陣奉告祭は、平安時代末期の時代考証を経て昭和30年（1955）から行われている。当初2年程はこの間眠神社を出発点としたが、その後は真夏に参加する出演者の体力的負担への配慮から三嶋大社出発へと変更された。



写真 菅奉納の儀

## おわりに

三嶋大社例大祭とつけ祭りは、三嶋大社を中心とする市街地の各町内により、地域の連帶感を育む行事として連綿と引き継がれている。これを支える環境として、三嶋大社を中心とする四辻沿いの歴史的なまち並みや周辺集落の情景があり、過去から現在まで、住民が最も大切にしてきた「地域の誇り」に繋がっている。三嶋大社と周辺地域を舞台とする例大祭とつけ祭りにかける人々の心意気は、伝統を継承しつつ自分たちの手で祭典を作り上げる楽しさを大事にしたいという願いとともに祭りを大いに盛り上げ、さらに、しゃぎり保存会の想い・活動に繋がって、地域の子どもたちを育成する一助となっており、これが例大祭とつけ祭りを継続してゆく大きな原動力となっているのである。

毎年、春の終わり頃になると、夕方、各町内の神社や公園などでしゃぎりを練習する音が聞こえ始める。この子どもたちや保存会が行う練習風景は、三島の初夏の風物詩である。そして、しゃぎり演奏の本番である三嶋大社例大祭とつけ祭り（三嶋大祭り）では、三嶋大社が執り行う諸神事と山車の引き回しや農兵節パレードなどに代表される市民参加のつけ祭りが三嶋大社社頭を中心とする市街地と一体となって、良好な歴史的風致を形成している。

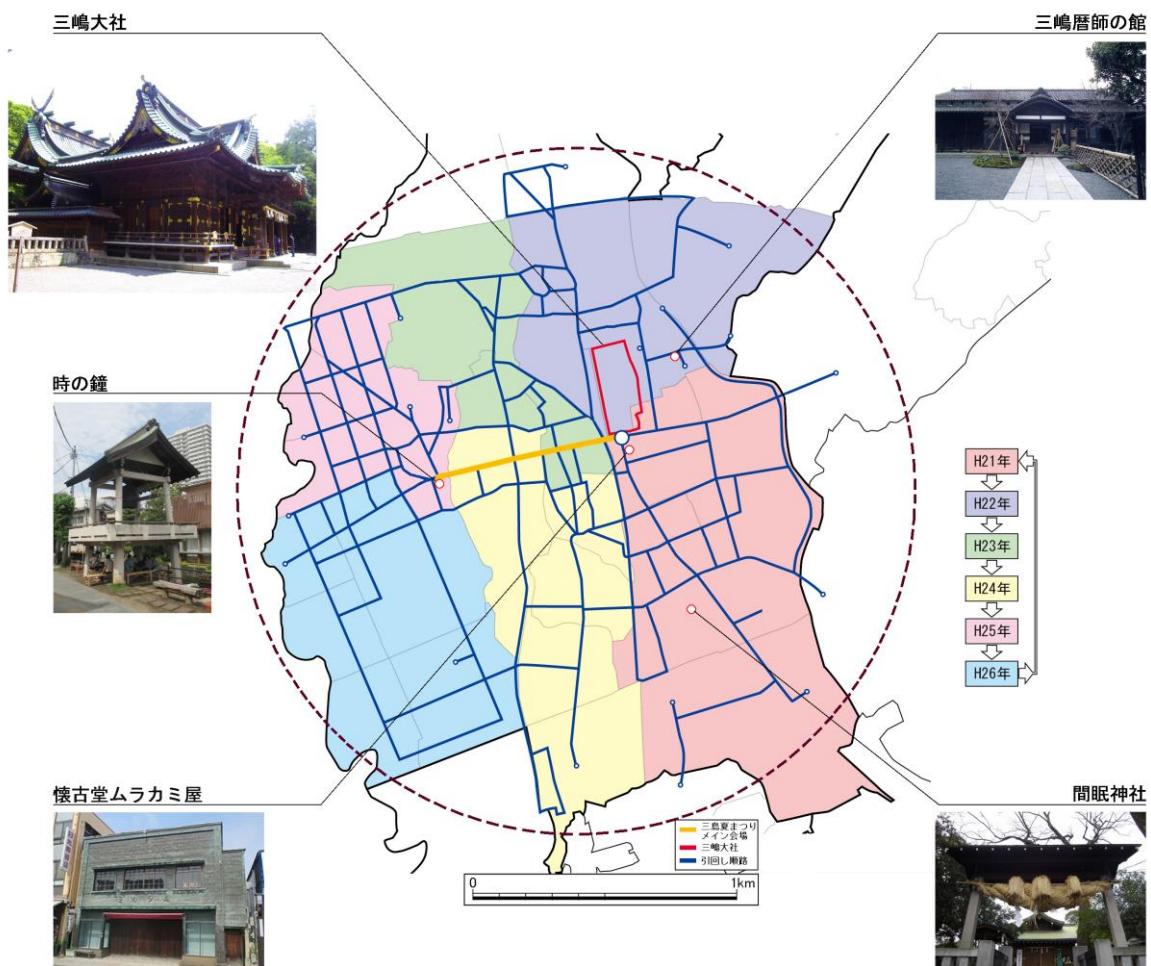


図 三島大社例大祭とつけ祭りにみる歴史的風致の範囲

## 《コラム》流鏑馬祭

最終日の8月17日、三島大社境内では流鏑馬祭が行われる。この流鏑馬祭は全速力で馬場を駆け抜けれる馬上から3ヶ所の的を次々に射抜くもので、天下泰平・五穀豊穣を祈る神事である。三島大社の流鏑馬の起源は古く、平安時代頃と伝えられ、文治元年(1185)6月20日の臨時祭に源頼朝が流鏑馬を奉納したと記録が残されている。以来、明治元年(1868)に至る680年間、6月20日と4月及び8月の二の大祭で流鏑馬役社人青木一家により執行してきた。

この流鏑馬祭は、明治時代に御改正により一度廃絶するが、昭和59年(1984)に武田流弓馬軍令故実司家金子教一門の奉仕により150年ぶりに復活し、現在は馬場に多くの見物人を集めて執り行われている。



写真 流鏑馬祭

### 三島大社例大祭とつけ祭り（三島大祭り）のタイムスケジュール

15日 山車とシャギリの日		
時間	行事	場所
9:00	若宮神社例祭	大社境内社若宮神社
9:00	奉納闘碁大会	大社伊豆魂神社
12:00	献茶式	大社舞殿
13:40	開会式	大社大鳥居前
14:00	山車安全祈願	大社大鳥居前
14:00	菅奉納祭	大社本殿
14:35	当番町山車市内引き回し	大社大鳥居前出発
15:00	山車シャギリ大会	大社西交差点～広小路間
15:00	少年剣道演武奉納	大社芸能殿
15:30	箏曲奉納演奏	大社舞殿
17:30	子供しゃぎり大会	大社大鳥居東西玉垣
18:00	宵宮祭・献燈奉告祭	大社本殿
18:30	人長舞・浦安舞奉納	大社舞殿
19:00	響演みしまサンバ&三島の和太鼓	大社宝物館前広場
19:30	三島大文字焼き点火	箱根西麓(笛原地先)
20:00	当番町山車競り合い	大社大鳥居前

16日 伝統芸能の日		
時間	行事	場所
10:00	例祭	大社本殿
11:30	合氣道奉納	大社芸能殿
13:00	人長舞・浦安舞奉納	大社舞殿
13:20	ハントン・ドリル演奏発表会	大社宝物館前広場
14:00	焼亡の舞奉納	大社舞殿
14:10	ブラスバンドコンサート	大社宝物館前広場
14:30	新陰流正伝泉会三島支部演武奉納	大社芸能殿
15:00	当番町山車パレード	大社大鳥居前出発
15:10	頼朝公旗揚出陣式	大社舞殿前
15:15	踊り屋台パレード	大社大鳥居前出発
15:40	音楽パレード	大社大鳥居前出発
16:05	頼朝公旗揚行列	大社大鳥居前出発
16:20	農兵節パレード	大社大鳥居前出発
16:40	万燈パレード	大社大鳥居前出発
17:00	様子のり	大社大鳥居前
17:30	大神輿宮出し	大社大鳥居前
17:30	三曲奉納	大社舞殿
17:50	大神輿渡御	大社大鳥居前出発
17:50	子供しゃぎり大会	大社大鳥居東西玉垣
19:30	手筒花火	大社宝物館前広場
20:00	当番町山車競り合い	大社大鳥居前
20:30	大神輿宮入り	大社大鳥居前

17日 踊りの日		
時間	行事	場所
11:00	崇敬会大祭	大社本殿
13:30	武田流流鏑馬	大社馬場
15:00	農兵節パレード	大社大鳥居前出発
15:40	みしまサンバパレード(往路)	大社大鳥居前出発
16:00	後鎮祭	大社本殿
17:00	みしまサンバパレード(復路)	広小路出発
17:30	子供しゃぎり大会	大社大鳥居東西玉垣
19:00	農兵節総踊り(自由参加)	大社宝物館前広場
19:30	みしまサンバ総踊り(自由参加)	大社宝物館前広場
20:00	当番町山車競り合い	大社大鳥居前